

## 仏様のおはなし新シリーズ 第54集 その1 「命の尊さ」

15年位前から、久留米のある高校で始まつた「命の教育」。当時は暴走行為、いじめによる自死など青少年をめぐる事件が社会問題化していた頃でした。若者との命に対する感覚の希薄さ、自覚になさ、どうしたらいいものかと試行錯誤の末、たどり着いたのが「ワトリの飼育から解体までの実習だつたと先生がおっしゃつていました。

生徒たちは生まれたばかりの卵を各自受け取つた。ふ卵器でふ化を見守り、ひよこがかえると当番制でエサや水やり。「親代わりに育てる楽しさ、やりがい」があつた反面、糞の片付けなど、やりがいや喜びばかりじゃなく、つらさ、大変さに向き合つて初めて、命の大切さ、尊さ、温かさ、に触れることができた。また食べ物への感謝の気持ちを実感することもできたのです。また、なぜ食事の前に「いただきます」後に「ごちそうさまでした」を言うのかも分かつてきましたことであります。

私は今、福岡県内の農業高校に勤めていますが、そこでも生物利用科の授業で同じように、「ワトリの飼育から解体までの実習を行つています。その現場を見ますと、生徒と先生との葛藤が手に取るように伝わってきます。「いやだ!」「できない。無理・・・」教諭は「目を離すな!」と叱咤し、手を生徒の手の上に重ねた。実習前日に写真を撮つた。「思い出に胸がつぶれそうだった。ただただ怖かった。」

一人の生徒がそう語つた。  
解体終了。処理したばかりの肉を水炊きにした。正直箸が進まない。生徒の一人はいつた。「初めてのことだったのでとつても怖かつた。でも自分たちのために命をくれた事に感謝。この気持ちは、いつまでも大事にしたい」全員が手を合わせた。「ごちそうさまでした」



かつて、「仏前で礼拝しなければ食事されてもらえない」という教育を受けた人々がいた。今、都會のレストランで合掌礼拝して食事をするひとがどのくらいいるでしょうか。あまり見受けないのであります。南無阿弥陀仏はみ仏のお心を受け取らせていただくただ一つの道であります。お念佛によつて、この一瞬一瞬が限りない命に包まれた貴重なものであることに気づかされ、常に自らを振り返り、精いっぱい生きられていくことを願つています。阿弥陀如来の救いは時代を超えて、人間の根本的課題を目当てにされていますが、私にとうては、この具体的な出来事を縁として、その救いがありますがたく受け取れます。表に表れた事件や体験にとどまらず、そこから私の人間性に気づかされ、そこに働く阿弥陀如来の智慧と慈悲を味あわせていただきたいことを願つています。